創出されてきた歴史的経緯への詳細な理解を提出している．

③このようなカテゴリー化を通したステレオタイプの形成により生み出されたチャマール・アイデンティティは，一方では 1927 年以降の原ヒンドゥー運動にみられるように，ダリト・アイデンティティを追求していくアイデンティティ闘争につながっていくが，他方でより普遍的な理念・価値を主張し，それが外部へ開かれていたことを著者は指摘する．原ヒンドゥー運動は，自らのアイデンティティを肯定的に捉え直し，自己集団の権利拡大に対する主張を展開しただけではなく，公共領域における差別撤廃や平等などの普遍的な価値を掲げ，それがムスリム連盟やアーリヤ・サマージなどダリト以外の組織に影響を与えたのである．著者は，ダリトの歴史的な行為主体性（agency）を描くと同時に，それが差異の強調のみに陥るのではなく，普遍的な理念を提示して一般の公共領域に刺激を与えたことを実証的に証明した点において独創的である．これは，従来のアイデンティティ・ポリティクスに対する新たな考え方を提示する画期的な作品であるといえるであろう．

このように，本書はチャマール・カーストの伝統的な仕事と皮革業が実際には連関性を有していなかったことを明らかにした．それにもかかわらず，チャマールがカースト・ヒンドゥーから付与された伝統的皮革産業従事者というステレオタイプに対抗し，ケガレからの解放を目指しながら，ダリト独自のアイデンティティに基づき活動を展開していった歴史を詳細に描いている．

しかし，現代インドにおけるダリトは，カーストと結びつけられた伝統的職業というステレオタイプを自らの歴史として積極的に受け入れ，たとえば清掃人カーストであれば自治体の清掃部門における雇用への参入にみられるように，伝統的職業とみなされてきた仕事に就いている．これは，ダリトがステレオタイプを戦略的に受容することで，自らの生き方に積極的な意味づけを行なってきた側面があることを示唆する．本書は，現代インドにおけるダリト解放運動への深い理解を試みるうえで，このようなダリトの戦略性の詳細に関する歴史的な考察も視野に入れる必要があるのではないか，という疑問を投げかけている．

小島敬裕.『国境と仏教実践－中国・ミャンマー境域における上座仏教徒社会の民族誌』京都大学学術出版会，2014 年，338 p.

藏本龍介 *

本書は，筆者が 2010 年に京都大学大学院に提出した博士学位論文を加筆・修正して出版したものである．中国雲南省における徳宏タイ族の仏教実践を，特に国境の地域社会との関わりに注目して描いた民族誌となっている．本書の最大の特徴は，中国とミャンマーの国境域に位置する徳宏の一村落（TL 村）における仏教実践を綿密に記述することに

* 東京大学大学院総合文化研究科

よって，上座仏教実践の新たな一側面を浮き彫りにした点にある．それは一言でいえば，出家者ではなく，在家者が主導する仏教実践である．それでは在家者が主導する仏教実践とは，具体的にどのようなものか．そしてそれは既存の上座仏教研究に対してどのような貢献を果たしうるのか．以下，本書の議論を確認してみたい．

序章「本書の課題と目的」では，先行研究を概観しつつ，本書の課題と目的が示される．徳宏の仏教実践には，①出家者が少ない，②複数の国家（ミャンマー，中国，タイ）や民族（ビルマ族，シャン族）の影響がみられる，といった特徴がある．本書の目的は，「このような国家と国家の狭間に注目することによって見えてくる『地域』とそこで展開される仏教実践に焦点を当て，長期フィールドワークで得た一次資料に基づいて，在家者を中心とする実践仏教の動態を解明する」（p. 3）ことにある．そしてその動態を明らかにするために，国境および複数の国家制度を「越境」する人々の生き方に注目するという視座が提示される．

第1章「『境域』空間をなす徳宏」では，徳宏と調査地の瑞麗市TL村および周辺地域の社会・文化的特徴とその歴史的背景が記述される．そして徳宏は，王朝時代より中国・ミャンマーという2つの政治的中心の狭間にあって，漢文化・ビルマ文化・シャン文化の影響を受けつつ，独自の文化を育んできた「境域」であると特徴づけられる．また1990年代以降は，中国側の経済発展とミャンマーでの政治的混乱によって，ミャンマーからの越境者が増加していることが指摘される．

第2章「徳宏タイ族の宗教的特徴」では，徳宏には出家者が極めて少ないことが指摘される．その理由として挙げられているのは，① 1950年代末から1970年代末にかけての大躍進・文化大革命による仏教の破壊と，②男子の出家慣行の欠如である．特に筆者が重視しているのは後者の理由である．つまり徳宏では，「出家によって本人のみならず両親も功徳を積むことができる」という，ミャンマーの「常識」が通用しない．こうした出家慣行の欠如が，同じく大躍進・文革を経験しながらも各寺院に出家者が止住している西双版納との違いを生んでいるとされる．

第3章「『在家』が織りなす信仰空間」では，TL村の年中儀礼が，村人の1年間の生活との関わりにおいて描かれる．日常的な仏教儀礼では，出家者が招かれることは極めて少なく，①盆地内の仏塔，②寺院内の仏像，③各戸の「仏典棚」に置かれた仏典，さらに数々の精霊への供物の奉納によって功徳や加護を得ることが重視される．つまり在家者は，他の上座仏教徒社会のように出家者に対して布施を行なうのではなく，仏あるいは精霊と直接的に関わることによって，その仏教実践を成立させている．そしてこのような交流においては，特に誦経・説法の在家専門家ホールーが，媒介者として重要な役割を果たしていることが指摘される．

第4章「担い手から見る宗教実践」では，在家者が中心となって営まれる儀礼の担い手に焦点が当てられる．TL村には，生活上の困難を解決するための，さまざまな仏教儀礼

が存在している．たとえば上述のホールーや女性仏教修行者は，仏への寄進によって守護を得るための儀礼を行なう．それに対し出家者および，サーラーやザウザーイ・ザウラーンと呼ばれる宗教的職能者は，おもに悪霊祓いの儀礼を行なう．そしていずれの儀礼においても，仏の言葉を記した文字や，それを誦える声が重要な役割を果たすことが指摘される．また，彼／彼女らの経歴の調査から，特に 1990 年代以降，ミャンマー側からの移住者が多くなっていることが示される．それに伴い，三蔵経典を重視するミャンマー側の仏教実践が導入される一方で，それとは相反する占星術や悪霊祓いといった仏教実践が根強くみられると指摘される．

第 5 章「ホールーの越境と実践の動態」では，ホールーについての分析がなされる．ホールーの主要な役割は，①寄進儀礼の際に在家者と仏・精霊を媒介する役割と，②在家者のために仏典を朗誦する役割に大別される．特に後者の役割は，在家者にとって重要な意味をもつ．つまり雨安居期間中に寺院で仏の教えをホールーの独特の節回しによって聴くことは，在家者の積徳行の核心をなしているとされる．このように徳宏の仏教儀礼において重要な役割を果たしているホールーであるが，文革の影響によって後継者が不足しており，特に 1990 年代以降，ミャンマーからの移住者によって担われる傾向にあるという．それに伴い，仏典に書かれる文字や誦経の際の語句は，ミャンマーのシャン州と共通するものへと変化している一方で，ホールーの仏典朗誦の節回しは変化していない．ここに筆者は，徳宏の村人たちの主体性と，「声の実践」の根強さを見出している．

第 6 章「仏教実践と政治権力」では，徳宏における僧俗の仏教実践が多様である理由が，ミャンマー・中国双方の政治権力の関わり方に注目して分析される．ミャンマーでは王朝時代より国王が出家者の「浄化」を進めており，また 1980 年には国家サンガ機構が整備され，国家公認の経典解釈に基づく実践への標準化が目指された．それに対し中国側では，政治権力による仏教管理の試みはみられるものの，多様な実践を統一するような制度化は進展していない．こうしたことが，徳宏において流動的かつ多様な実践をもたらしていると論じられる．

終章「徳宏タイ族の仏教実践とその行方」では，本書のまとめと，先行研究と比較したときの新たな学術的貢献，および今後の展望が示される．筆者によれば，上座仏教徒社会についての先行研究は，三蔵経典に記された教理に基づく実践や，国家の築く制度が規定する実践を「正統」とみなし，地域に根ざす実践を，正しい実践から逸脱した形態と捉える傾向があった．それに対し本書では，先行研究では長らく等閑視されてきた「境域」に位置する徳宏の仏教実践に注目した．それによって，「仏教の実践者たちが国家の枠組みを超えて地域に根ざした実践のダイナミズムをもたらしている現実，出家者を媒介としない仏像や仏塔・仏典と在家者との直接的な関係に基づく実践，そして教派や村落，個人によって異なる多様な戒律実践のあり方などが明らかになった」（pp. 284-285）と結論づけ

られる．

以上，本書の議論を概観した．次に本書の貢献を改めて整理しておきたい．本書の貢献は第1に，これまでほとんど研究がなされていない徳宏の仏教実践に関する第一級の民族誌であるという点にある．筆者の語学力（中国語・ビルマ語・徳宏タイ語の習得）と卓越した調査能力によって，徳宏における豊穣な仏教実践の姿を浮かび上がらせている．また豊富な写真や，動画資料とのリンクといった工夫は，読者の理解を助けるうえで大いに役立っている．本書で提示されている民族誌的データは，単に徳宏研究のみならず，人類学的な仏教研究において，極めて高い資料的価値をもつといえるだろう．第2に，徳宏という「境域」に焦点を当て，それを「越境」していく人々の動きに注目することによって，地域で展開する仏教実践の動態を浮かび上がらせることに成功している．第3に，しかし本書は，単なる徳宏に関する民族誌ではない．本書で描かれているのは，出家者を重要な結節点とする他の上座仏教徒社会とは明らかに異なる，「もう一つの」仏教実践である．それは本書で詳述されているように，ホールーやヒン・ラーイが主導し，そして出家者をもその中に取り込んでいくようなシステムである．

最後に，疑問点を2点，記しておきたい．1点目は，ホールーの位置づけについてである．本書ではホールーを「誦経・説法の在家専門家」と説明するように，在家者として位置づけている．しかし一方でホールーは「仏や守護霊と在家信徒の間の媒介者としての役割を果たす」（P. 224）と述べられているように，一般の在家者とは一線を画す存在でもある．これはたとえば神とムスリムの間を媒介するウラマー（イスラーム法学者）のような，ある種の聖職者のようにもみえる．ホールーを既存の「出家者／在家者」という枠組みに回収するのではなく，むしろそこから逸脱する存在として描いた方が，徳宏における仏教実践の新しさをより鮮明に打ち出せたのではないか．2点目は，制度と地域の実践という対比についてである．終章では，①経典および制度が規定する均質的な「中央」の実践と，②地域レベルで展開する豊穣で多様な「境域」の実践，という対比が強調される（p. 285）．しかし現実の仏教実践はそれがどこであれ，経典や制度が規定するような，いわば「model for」の実践とは異なる．つまり「中央」における仏教実践もまた，経典や制度が規定するとおりのものではない．その意味でこうした対比は，「中央」の仏教実践についてのステレオタイプ的な見方を不用意に強化することにはならないだろうか．

以上，評者なりの疑問を述べたが，理論的な枠組みの設定方法に関わるものに過ぎず，本書の価値をいささかも減じるものではない．終章で筆者は，徳宏において典型的に観察されたこのシステムが，より広範囲に分布している（いた）ことを示唆している．それが実証的に示されるならば，上座仏教徒社会における新たな現実を開示するにとどまらず，上座仏教徒社会と大乗仏教徒社会という区分を架橋しうる成果となるだろう．研究のさらなる進展を期待したい．